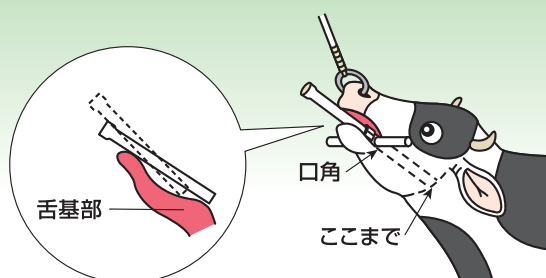
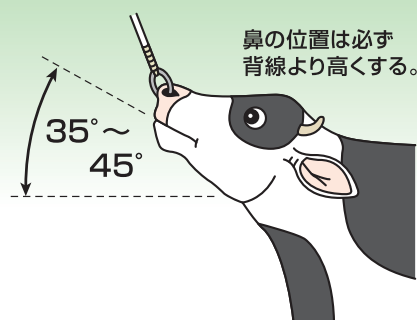


## 投与上の注意点

本製品を投与する際は、下記の点にご注意ください。

- できるだけ空腹時に投与してください。
- 牛の姿勢を真っ直ぐに保つように、確実に保定してください。首をひねった場合は投与を中断してください。
- 専用投与器のクロス位置を正確に調整してください。
- 無理に挿入するのではなく、牛に飲み込ませるようにしてください。
- 3個目の投与をする前に、いったん投与器を抜いて牛に一呼吸させてください。
- 投与後は水を飲ませ、確実に第一胃に入るようにしてください。
- ルーメンファイブは15分程度で開きます。投与後は牛の様子を観察してください。



## 投与時に準備するもの



### ■さらに詳しい資料をご用意しています。

- ・投与マニュアル
- ・ルーメンファイブ解説（詳細版）
- ・ルーメンファイブ導入例
- ・ルーメンファイブの応用（肉牛）
- ・ルーメンファイブの応用（乳牛）
- ・ルーメンファイブによる暑熱対策
- ・ルーメンファイブが肉質を改善し増体率を向上させるしくみ
- ・ルーメンファイブ応用による牛肉の旨味向上とヘルシー食肉生産への提案
- など

●お問い合わせ・資料のご請求は

# Meiwa

名和産業株式会社

0120-543241

〒600-8896 京都府京都市下京区西七条西石ヶ坪町7-4  
TEL.075-312-4728 FAX.075-313-1655  
e-mail : manager@meiwa-sangyo.co.jp



# ルーメンファイブ®

PAT No. 1989045  
動物用医療機器承認番号：7畜A第1193号



# Meiwa

<http://www.meiwa-sangyo.co.jp>



# 繊維質飼料の物理的刺激を代替する 動物用医療機器

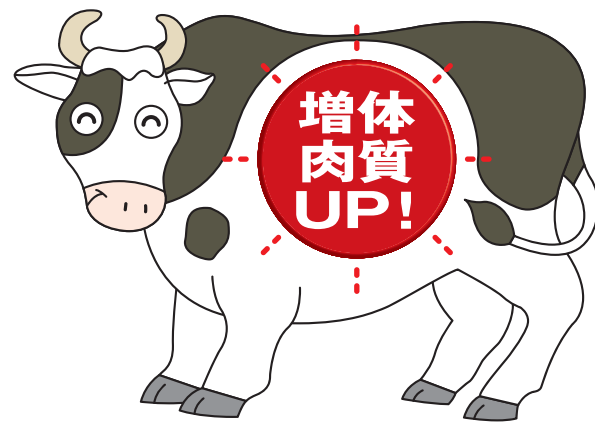
## 《ルーメンファイブとは…》

ルーメンファイブの形状や材質は、度重なる研究の結果、効率的で最適な機能を発揮できるように製造されています。ルーメン粘膜への適度で持続的な物理的刺激により、反芻が促進され胃内のpHを調整し、微生物の働きを活発にします。



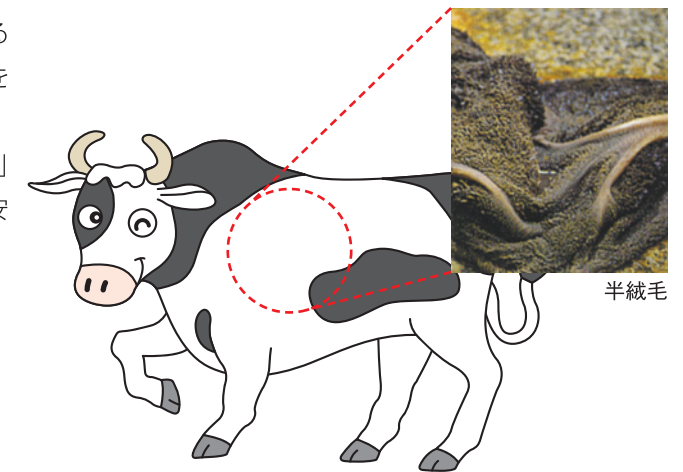
### 1 食い込みがよくなり、増体や肉質の向上が期待できます。

ルーメン粘膜への物理的刺激によって濃厚飼料の利用性が高まるため、増体と肉質の向上が期待できます。  
また、粗飼料の減量によってプロピオン酸型発酵に移行し、肝臓の糖新生や膵臓のインスリン分泌を促進することにより、肉質や脂質の改善に寄与します。



### 3 牛の健康を保ち、安心・安全な牛肉を生産できます。

物理的刺激によって半絨毛の形成・維持を促進するため、栄養の吸収がよくなり、健康で効率的な成長をうながします。  
遺伝子組み換えのない弊社「ピアレージ(ビール粕)」を併用することで、さらに健康を増進し、消費者も安心できる安全な牛肉を生産できます。



### 2 粗飼料の減量によって生産コストを引き下げます。

粗飼料の物理的刺激をルーメンファイブに置き換えることで、飼料費の削減と作業の軽減、人件費の節約が可能になります。家畜排泄物処理法の施行で大きな負担となっている糞尿処理の費用も削減でき、生産コストの全体的な引き下げに役立ちます。

#### ● 従来飼料の場合(13ヶ月)

$$\text{配合飼料 (約200,000円)} + \text{粗飼料 (約22,000円)} = \text{約222,000円}$$

#### ● ルーメンファイブ使用の場合

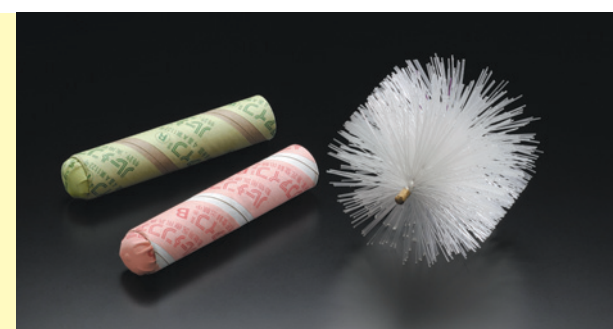
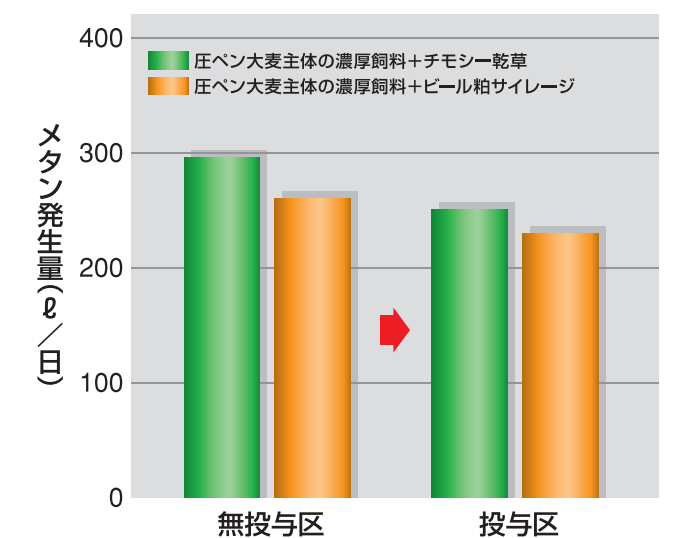
$$\text{配合飼料 (約175,000円)} + \text{B粕 (約14,000円)} + \text{粗飼料 (約18,000円)} + \text{ルーメンファイブ (6,600円(3個使用))} = \text{約213,600円}$$

増体・肉質 UP!

※「肉牛ジャーナル」より抜粋。飼料費は当社で計算。

### 4 メタンの生成を抑制し、環境負荷を軽減します。

ルーメン粘膜への刺激と粗飼料の減量によって、ルーメン内の発酵がプロピオン酸型に移行し、温室効果ガスとして問題視されているメタンの生成を抑制します。  
弊社「ピアレージ(ビール粕)」の併用によるメタン生成抑制のさらなる効果も報告されています。



### 牛を熟知する畜産農家が認めた、確かな効果と実績。

1992年の発売以来、全国の畜産農家のみなさまにご愛用いただき、2007年7月に販売累計70万本を達成しました。  
実に23万頭を超える「ルーメンファイブ牛」が出荷されたこととなります。

今後も畜産農家のみなさまと地球環境のために、さらなる研究開発を続けます。

